



日本酒で乾杯推進会議レポート
第13回総会・フォーラム&懇親パーティ



全国で、海外で、今年も一斉乾杯！



午後6時、石毛代表(中央)ら100人委員会のメンバーが勢ぞろいして全国一斉日本酒で乾杯！(中央下段はミス日本酒の田中沙百合さんと準ミスのおふたり)

日本文化と日本酒の再生を祈り、7万7千人が一斉乾杯



日本酒と日本文化のルネサンスを旗印に運動を続ける「日本酒で乾杯推進会議」の第13回総会・フォーラム&懇親パーティが、日本酒の日・10月1日の午後、東京元赤坂の明治記念館で開催され、懇親パーティでは、昨年につき、各地の日本酒ファンとともに全国一斉日本酒で乾杯！また、ネット中継でシンガポールの人々との国際親善乾杯も行われ

るなど、国内外およそ7万7千人が参加して、日本酒の日の訪れと運動の進展を祝い合いました。



シンガポールの人々と国際親善の乾杯(中央は七田需要開発委員長)



イタリアからも
乾杯の動画





広がる運動の成果。国内外で「日本酒で乾杯！」の大歓声

日本酒からの手紙

「ニッポン人には日本が足りない、と言われていると思います。」

「和服をさりげなく着こなしてみたい」

「ほどよく美しい言葉で語りかけたい」

この国で育まれてきたよき日本文化の数々。私たちがほんの少し心がけるだけで、まだそれが取りもどせそうです。

日本酒を粹に飲んでみたいと思いませんか。

日本酒は、長い歴史の中でしなやかな感性とすぐれた技術で磨きあげられてきました。

甘くて辛い「妙味の酒」。

特定の料理を選ぶことなく、心身を癒し、ご縁をつなぎ、和(なごみ)に酔うお酒です。

あらたまった礼講からにぎやかな無礼講に移るとき、私たちは乾杯します。

「みなさまのご発展とご健勝を祈念して……何に向かって祈るのでしょうか。」

カミ様？ホトケ様？ご先祖様？

ニッポン人の心の奥底に宿るものとふれあうとき、新たな力が生まれるはずですよ。

これからの人生をますます豊かなものにするために……。

日本酒で乾杯！

□ 発足から 12 年。各地で乾杯条例制定も

「乾杯」という行為を通じて、日本文化と日本酒への誇りをもう一度取り戻してほしい—平成 16 年 10 月、業界の思いを込めた「日本酒からの手紙」(上)を掲げてスタートした日本酒で乾杯運動。「日本が足りない」と言われる現代人に向けた、業界一丸のムーブメントも丸 12 年を経過しました。

この間、推進母体である「日本酒で乾杯推進会議」、そして各界有識者で結成された中核組織「100 人委員会」(代表=石毛直道 国立民族学博物館名誉教授)を中心とした取り組みは着実に進展。「推進会議」の会員拡大(現在約 3 万 8 千人)、乾杯や日本文化に関する研究の蓄積、自治体による乾杯条例の制定(現在 124 件。一部日本酒以外も含む)など、多くの成果を上げています。



乾杯の起源を探った『乾杯の文化史』、日本文化における日本酒の重要性をまとめた『日本酒と日本文化』も、運動の大きな成果。

□ 年に一度の乾杯イベント。クライマックスは全国一斉乾杯

総会・フォーラム&懇親パーティは、運動の更なる進展に向けた関係者の結束固めを目的に毎年開かれるビッグイベントです。今回も、①活動報告や感謝状の贈呈式などを交えた総会、②「江戸の食と酒～日本のかたち、日本のこころ」をテーマにしたパネル討論(フォーラム)、

③全国の日本酒を料理と共に楽しむ懇親パーティと、3部構成のプログラムが繰り広げられた中、最大の山場となったパーティ冒頭の全国一斉乾杯には、ユーストリーム配信された会場のライブ放映に合わせて、国内外の日本酒ファンが参加。午後 6 時ジャストを期して、全員一斉に日本酒で乾杯の大歓声を巻き起こしました。

7時半にはシンガポールと東京をネットで繋ぎ国際親善の乾杯が行われたほか、イタリアからも乾杯の録画映像が届けられるなど、後日の集計では、昨年(4万7千人)を大幅に上回る 7万7千人もの人々が参加したことが報告され、公式 HP や Facebook には、多数の乾杯写真投稿が寄せられました。



事前告知のチラシ



長崎県北地酒同好会に感謝状。フォトコン大賞は吉岡玲子さん

第13回「日本酒で乾杯推進会議」総会・フォーラム 「江戸の食と酒」～日本のかたち、日本のこころ～

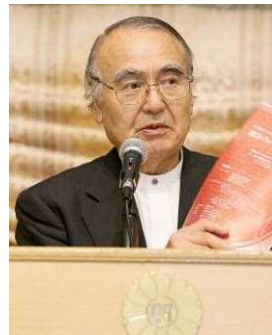


100人委員の阪田美枝さん(『日本の酒造り唄』著者)が読み上げる開会宣言に、出席者全員が唱和して、第13回総会の幕開け。

「私たちは日本を愛します。日本文化を愛します。そして日本酒を愛します。日本に乾杯。そのはじめに、日本酒で乾杯。私たちは、日本文化のルネサンスをめざして、ここに『第13回日本酒で乾杯推進会議』総会の開会を宣言いたします」



◀ 総会冒頭、100人委員会の石毛代表が挨拶。「若い人に、日本文化、そして日本酒の文化を伝えるのは、我々年長者の義務。今日参加された皆さんも、どうか、若者と一緒に乾杯して、日本文化と日本酒の素晴らしさをどんどん伝えてください」



◀ 活動報告を行った推進会議の西村運営委員長は、自治体の乾杯条例制定件数が計124に達したことを報告したほか、今年度の計画について「引き続き会員数拡大に努めると共に、地域への運動拡大を目指す」などと説明しました。



石毛代表から感謝状を受ける島田代表

◀ 運動に顕著な貢献のあった団体に感謝状を贈呈。今年は、佐世保市を中心に活動する長崎県北地酒同好会が選ばれ、石毛代表は「運動の趣旨に賛同し、機会ある毎に進んで日本酒で乾杯して、運動を強力に推し進めてきた」と、その功績を称えました。



◀ 第6回「デジタルフォトコンテスト」の表彰式では、大賞を受賞した吉岡玲子さん(東京都、作品タイトル「日本酒女子会」)に、賞金5万円と日本酒1年分(720ml120本)が贈呈されました。



「江戸の食と酒」をテーマにパネル討論。江戸の粋を伝える三味線漫談も



「江戸の食と酒～日本のかたち、日本のこころ」をテーマとしたフォーラムでは、民俗学者の神崎宣武氏をコーディネーターに、日本の食文化に詳しい原田信男氏（国土舘大学教授）、100人委員の加来耕三氏（作家・歴史家）、比較文化史や女性史の研究で知られる佐伯順子氏（同志社大学教授）が、江戸時代の食文化を巡って興味深いお話を展開（各氏の発言のポイントは下記のとおり）。討論の後には、三味線漫談家・三遊亭小円歌さんの高座でリラックス。楽しい話芸を始め、新内、都都逸、かっぽれ踊りなど、江戸の粋を伝える高座芸の真髄に、参加者はすっかり魅了された様子でした。



三遊亭小円歌さんの粋な高座姿



▲ 神崎宣武氏

「お酒とは本来ハレの飲み物で、昔は日常的に飲まれることはありませんでしたが、都市化が進んだ江戸の中期になると、江戸っ子は普通に飲酒を楽しむようになり、1人当たり年間20升、1日2合程度の酒を消費していたことが記録されています」



▲ 原田信男氏

「江戸の初期には門前の煮売りや立売りを利用する人が多く、外食などはしなかったのです。豊かになるにつれて料理茶屋などが生まれ、会席料理が発達する一方、酒の小売屋の流れから居酒屋が登場してきます。江戸の食文化にはこの2つの流れがあります」



▲ 加来耕三氏

「TVの時代劇などで見られる江戸の姿は殆どが中期以降のもの。江戸っ子が居酒屋などでお酒や料理を気軽に楽しむようになったのは文化・文政期頃からで、同じ江戸でも前期と後期では様子が違う。そこを混同すると、本当の江戸の姿は見えません」



▲ 佐伯順子氏

「料理茶屋が生まれる以前、江戸の初期から酒と料理が重要な役割を果たしていたのが遊郭の世界。遊郭には現代の文化センター的側面があり、おいしい料理とお酒をいただきながら、太夫が演じる超一流の芸を楽しむ、一種のディナーショーのようなものでした」



「3、2、1、日本酒でカンパイ！」懇親パーティで歓談のひと時



全国一斉乾杯に先立ち、100人委員に原田、佐伯両氏（パネル討論参加者）、フォトコン大賞の吉岡さんらをまじえて鏡開き

一日のメインイベントとなる懇親パーティは午後5時45分に開幕。最初に、石毛代表以下100人委員会メンバーらによる鏡開きが行われた後、会場のライブ映像がネット放映される中、いよいよ6時の全国一斉乾杯へ向けてカウントダウンがスタート。「3、2、1、日本酒で乾杯！」の掛け声とともに、参加者全員が高らかに杯を掲げると、会場の雰囲気は一気に最高潮に。

この後参加者は、シンガポールとの国際親善乾杯、イタリアからの乾杯映像などを楽しみながら、全国各地の日本酒と豪華な料理を囲んで、歓談のひと時を過ごしました。



午後6時、一斉乾杯の杯を掲げる参加者



全国の日本酒と料理を囲んで懇親のひと時



シンガポール会場のネット映像。参加者は150人

なぜ日本酒で乾杯なの？
日本酒は日本の伝統と文化の中心だから日本酒で乾杯することの意義を伝える動画も放映。



イタリアからは日本酒スタイリストの手島麻記さんがレポート



中締め挨拶は中央会の篠原会長。「乾杯運動で日本は変わる」



全国かまぼこ連合会



全日本漬物協同組合連合会



全国珍味商工業協同組合連合会



全国調理食品工業協同組合

今年も関連業界4団体が協賛出展して日本酒にぴったりのオツマミをサービス。どのブースも大人気でした。

日本酒で乾杯
推進会議



懇親のタベ 2016 スマイル集

